A new light on the Olympic Village～選手村に新たな光を～

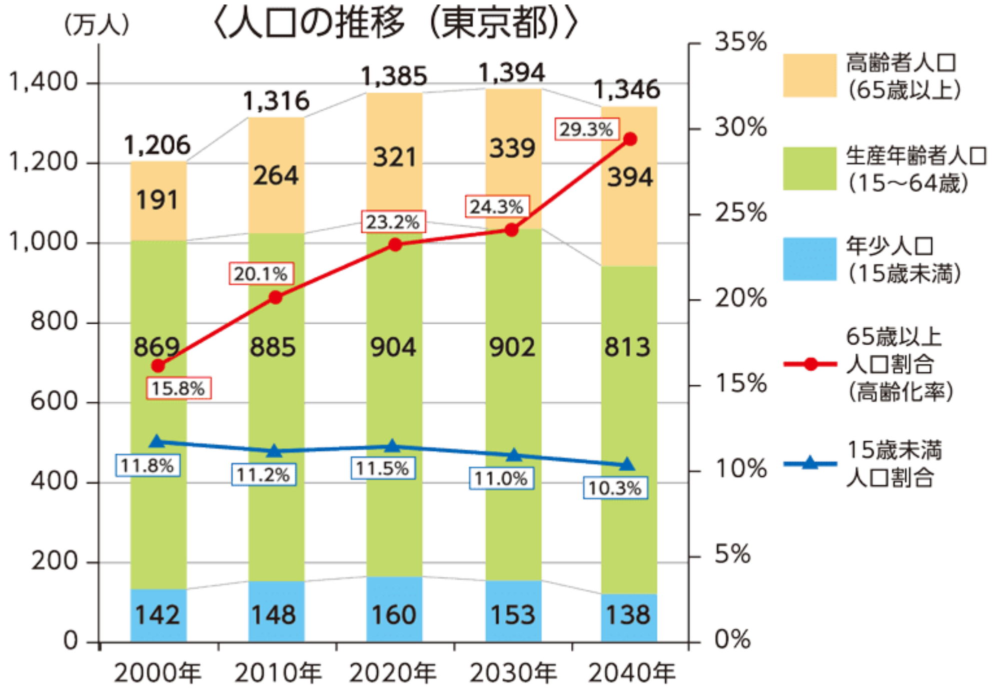
福岡県立鞍手高等学校
来島 凜太郎　岩尾 拓望　立見 直隆　矢野 凌空　河村 理佳　金澤 由佳
指導教員 西村 彰

1. テーマ設定の理由

2020 年私たちの住む日本で東京オリンピック、パラリンピックが開催される。それにあたり競技場や、選手がオリンピック開催期間中に宿泊する選手村が建設される。2016 年に開催されたリオデジャネイロオリンピックでは、世界中にたくさんの感動を届けることができ、一見大成功に終わったように思える。しかし、オリンピック終了後メイン競技場は荒れ果ててしまい廃墟化してしまった。その理由として、選手村は一般用に 17 階立てマンションとして 2000 万円～8000 万円で売り出されたが、あまりにも値段が高額であるため売れ残ってしまいうまく活用できていない。一方、２０１２年のロンドンオリンピックでは、将来、ロンドンには何を残すべきかを考え、連盟や組織の四者が連携して利用促進を積極的に行ったり、選手村に限らず、例えば、水泳会場は大会後に「市民プール」として使うことで選手が実際に使用した施設を子供たちが泳ぐことができ、子供たちの夢を膨らますこともできる。このように、ロンドンオリンピックは州全体が協力し、うまく跡地を利用したと考えられる。そこで、このようにリオオリンピックのような失敗を繰り返さず、ロンドンオリンピックのようにうまく利用するために社会に役立つ場所を作りたいと考え、選手村に着目し持続可能な施設を作るとともに現在の日本の社会問題である「高齢化」に目を向け、高齢者の方々を中心とした施設を作りたいと考えた。また、「スポーツ」にも着目して健康の保持増進が可能なサービスも考えた。その施設を作る上で現在では東京オリンピック、パラリンピック後の選手村は住宅棟、商業施設、小中学校、消防署、公園、客船ターミナルなどが建設される予定である。

もちろん、今後の日本・東京都の現状として待機児童の増加、上京する若者の増加などがあげられるが、今回は「高齢化」、「スポーツ」に目を向けて話を進める。

「高齢化」は医療や福祉の発展により年々進んでいる。また東京都の高齢者の割合は年々増加傾向にある。これらのことを踏まえ私たちは、リオオリンピックのような失敗を繰り返させない、「高齢化」の問題を少しでも解決する手立てを見つけ、今後も活気溢れる場所にしようと考えた。



2. 仮設と提案

私たちは使用方法がいまいち不透明であるオリンピック終了後の選手村を高齢化が進んでいる日本の現状とうまくマッチさせてまったく新しい町に生まれ変わらせることができないかと考えた。

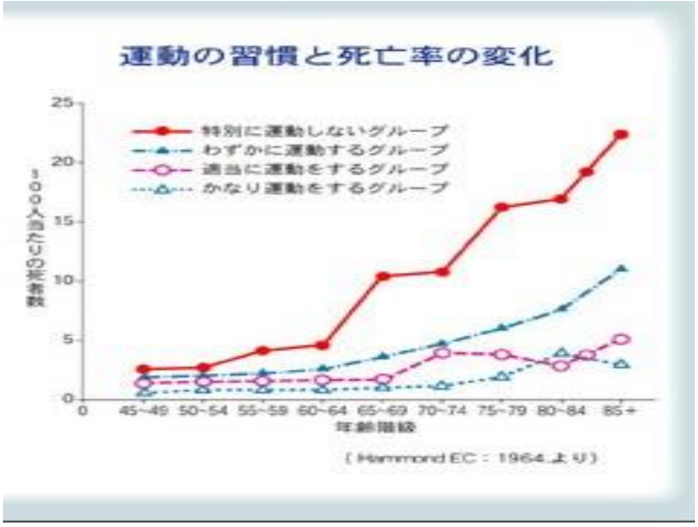
そこで私たちは、オリンピック終了後の選手村の跡地を利用するということもかねて選手が実際に使用していた選手村の宿泊施設を高齢者の方々が住みやすいように、バリアフリー化やユニバーサルデザインを施し、1つの大型老人ホームを作り、その周りの建物は高齢者の家族の方々が住める住宅施設を設け、日常生活も難なく行えるようにする。こうすることにより、時間をかけずにすぐ老人ホームに足を運ぶことが可能になり高齢者の方の様子を確認することができるので、高齢者自身もそのご家族の方も安心して毎日生活することができる。また住人たちが使用するためのさまざまな種類の商業施設を設けることはもちろん、高齢者が多く住むことが前提であるため病院などの医療施設も設けて安全かつ暮らしやすい町にする。ちなみに高齢者とその家族の方々だけでなく老人ホーム職員や病院関係者も住める住宅施設も設ける。もちろんこれらに該当しない人々が住宅施設に住むことも可能である。

また、スポーツに関連したサービスも取り入れたいと考えた。具体的な内容としては、現在日本でデイケアサービスなどが取り上げられている。そのデイケアサービスに運動することを取り入れ、そこで高齢者の方々がスポーツを行うことを提案する。運動の強度に関係なく1日30分の運動を週6日行うことで、死亡率が40%も減少すると言われている。つまり高齢者になってからも定期的に運動をし続けている人は、そうでない人に比べて長生きする確率が高くなっている。また、定期的な運動は死亡リスクを低下させるだけでなく、高齢者になればなるほど発症しやすくなる認知症の予防にもつながることが分かっている。このように定期的な運動は、死亡リスクを低くすると同時に認知症の予防にも繋がると言われている。いずれも軽い運動を1日30分ほど続けるだけでいいので、高齢者でも

難しくないと考えられる。それを踏まえ、高齢者の方々が楽しみながら健康の保持増進を図ることができるサービスを提案する。

3. 検証

これらの提案の最大のメリットは、オリンピック終了後の選手村のレガシーをしっかり



とした形として残せることである。また高齢者ファーストで町づくりを行い、高齢者が暮らしやすい町を作ることにより、超高齢化社会を迎えたときの各都道府県や各自治体の目指すべきモデル都市としての役割も果たすことが可能だと考えられる。また機能面について考えてみても選手村は中央区に位置することから交通の便も非常に良く、質の良い生活を送ることが可能であると予想できる。

もしこれらの提案を取り入れなった場合に考えられることは、6000 万円～8000 万円になると言われている選手村を改装したマンションの売れ残り、最悪の場合リオデジャネイロオリンピック同様に選手村が廃墟化してしまうことだ。こうしたことを防ぐために、ターゲットを高齢者に絞って町づくりを行うことでたくさんの住居希望者を得ることが考えられる。

また、老人ホームで、スポーツに関したデイケアサービスを取り入れることにより定期的な運動は死亡リスクを低下させるだけでなく、高齢になるほど発症しやすくなる認知症や生活習慣病の予防にも繋がる。他にも新たな趣味や生きがいを発見でき、より活力のある充実した生活を過ごすことができる。

4. 結論

私たちが提案した選手村を高齢者向けの大型施設に改修する計画は、これまでには見ることができなかった選手村の有効活用方法である。高齢化が進む日本独自の選手村活用方法であるため、もし成功すれば日本国内だけにとどまらず世界各地からも評価を受けるに違いない。また大会終了後の選手村の活用が成功することにより、莫大な費用がかかるためにオリンピック、パラリンピック誘致を見送っている都市の背中を押すことにもつながるだろう。

また、デイケアサービスに運動やスポーツを取り入れ、高齢者の方々に 1 日 30 分の軽い

運動を行ってもらうことで、楽しみながら健康の保持増進を実現することが可能である。

5. 今後の課題

今後の課題として、バリアフリー化、ユニバーサルデザインの付設、内装や安全面の確保、これから数十年にわたって生活していくための機能の追加、また病院やその他商業施設の誘致や建設が必要になるが、これらの膨大な費用はどうするのかが挙げられる。また少子高齢化により労働力不足に陥ることが懸念されている今日、如何様に老人ホーム職員、病院関係者、商業施設の従業員確保をするかも課題の一つである。それに今回の東京オリンピック、パラリンピックで使用される選手村は海のすぐ近くに建設される。そのため、もし地震、津波などの自然災害が起きてしまった時の対策も練る必要がある。選手村はたくさんの建物が密集することが予想できるので、二次災害が起こる可能性も十分に考えられる。こうした安全面についても不安がたくさん残ってしまう。これらについては今後も調査を続け、有効的な解決方法を模索していきたい。

また、スポーツに関するデイケアサービスを行う際、一人一人の運動能力には個人差があるため、利用する方の精神負担にならないように利用する本人の意思もしっかりと尊重しなければならい。

6.出典

会場：選手村｜東京オリンピック・パラリンピック競技大会
https://tokyo2020.org/jp/games/venue/olympic-village
選手村の整備状況｜選手村｜競技会場等の整備｜東京都の取組
https://www.2020games.metro.tokyo.lg.jp/taikaijyunbi/...
東京オリンピック選手村の跡地はどうなる？五輪開催後の跡地
https://flatoffice.jp/chintai/tokyogorin
東京オリンピック選手村跡地のマンション「晴海フラッグ」
https://gendai.ismedia.jp/articles/-/60177

東京五輪終了後、競技施設と選手村はどうなるの？
https://hajimete-sangokushi.com
競技施設や選手村のレガシーを 2020 年に向けた取組の方向性
https://www.2020games.metro.tokyo.lg.jp/2020_legacy01web.pdf
選手村 - Wikipedia
https://ja.wikipedia.org/wiki/
オリンピック会場は荒廃してしまう？遺産として活用できる
www.1242.com/lf/articles/62601

我が国における総人口の長期的推移
www.soumu.go.jp/main_content/000273900.pdf

運動と遺伝子
http://sugp.wakasato.jp/Material/Medicine/cai/text/subject07/no15/html/section1.html